

平年漁況図考

はじめに

毎年赤とんぼ（アキアカネ）が飛び出す頃になると思いだすのが、秋ビンである。秋ビンといっても、近頃はこの言葉はあまり聞かないから、ピンとくる人は少ないかもしれない。秋ビンは下りガツオのビンナガ版にあたり、竿釣りで獲られる脂のたっぷり乗った比較的安価なビンナガであり、漁獲量もかなり多かったので、消費者にも大変人気があった。ところが、最近秋ビンが市場やスーパーでは昔のように見られないようである。漁場が変化したのか、魚はいるが漁業が変化して獲りに行かなくなったのか、そのあたりの情報が見当たらないのは残念である。

さて、漁場や漁期の経年的変化は、それを引き起こす種々の要素の反映である。昨今は、このような記述型の研究は評価が低いようであるが、適切な説明や解析が加えられた漁況図の作成は連綿と続けられるべき立派な研究分野だと考えている。戦後まもなく世界に進出した日本のマグロはえ縄漁業に関する“平年漁況図”という分厚い図版等は、詳しい解説が別冊で付き、世界に類を見ない試みに取り組んだ当時の研究者の意気を感じさせ、彼らがマグロ類資源にどのような知見や考えを持っていたかも知ることが出来る。今につながる歴史的な漁業の変遷を知ることができるこれらの著作は、今後の研究に多くのヒントを与えるのではないだろうか。そこで、“平年漁況図”とそれに続く著作、さらにそれらに関連する特徴や問題点を紹介し、今後の取り組みに対する期待を述べたい。

平年漁況図の変遷

マグロ・カジキ類の平年漁況図は戦後間もなく旧南海区水産研究所から2度出版されている（1952年版および1958年版）。1952年といえば、日本のマグロ漁業の操業が米国により日本近海に制限されていたのが撤廃され、世界の3大洋目指して飛躍的な拡大を始めた記念すべき年である。この時期にはまだマグロはえ縄漁業の漁獲統計が系統的に収集編纂されていなかったもので、日本の主要なマグロはえ縄漁船の水揚げ港で、研究員が主体となり、精力的に情報を収集していた。説明版には漁業の歴史や漁獲物の体長・体重組成なども適宜記録されており、釣獲率（CPUE）で示した漁場の広がりや季節変化が詳しく解説されている。その後長くこれに類似する平年漁況図は作成されなかったが、1997年に旧遠洋水産研究所による“はえなわで漁獲されるまぐろ・かじき類の平年漁況図、1967-1992年”（魚崎他、1997、222ページ）が作成された。しかしながら、この詳細な労作は研究者の段階でのみ利用され、外部に公表されることはなかった。その事情について、少し長くなるが、この図版の前書きの一部を以下引用しておく：“今回の平年漁況図の作成を思い立ったのは、上述の二つの平年漁況図のあと、その当時とは漁業が全

く変化してしまったにもかかわらず、この種の出版物がないためである。この種の平年漁況図が出版されなかった大きな理由のひとつとして、漁業規制等のからみで、このような情報を外部に公表することが困難になってきたことが挙げられる。これは昭和58年度以降「まぐろはえ縄漁業漁場別統計調査報告」が公表されなくなったことを考えてもおわかりいただけると思うが、この問題はいまだ解決されていない。この平年漁況図は国内の研究者用に作成したものである点に、読者は十分注意していただきたい。”

さて、この新たな平年漁況図は年代を①1967-1975年（まぐろはえ縄漁業全盛期）、②1976-1985年（ほぼ200海里制度の定着期）、③1986-1992年（まぐろ漁業に関する実質的漁獲規制の導入初期）に分けて、それらの時期における平年漁況図を魚種別、緯度経度1度別、月別に釣獲率、使用された針数を示されている。まぐろはえ縄漁業全盛期の操業域が図示されているが、これほどの海域をカバーした漁業はおそらく日本のまぐろ延縄漁業以外にはないと思われる（図）。これらの3つの編年漁況図を比較することで、開発当初の熱帯マグロ狙いの操業から冷凍技術の発展による温帯マグロへのシフト、さらに規制の強化に伴う漁場の変化等が明瞭に理解できる。大西洋のクロマグロを見ると、現在では操業が無いメキシコ湾、地中海、ビスケー湾での操業がみられ、逆に現在の主漁場であるアイルランド沖の漁場はこの時代にはない。

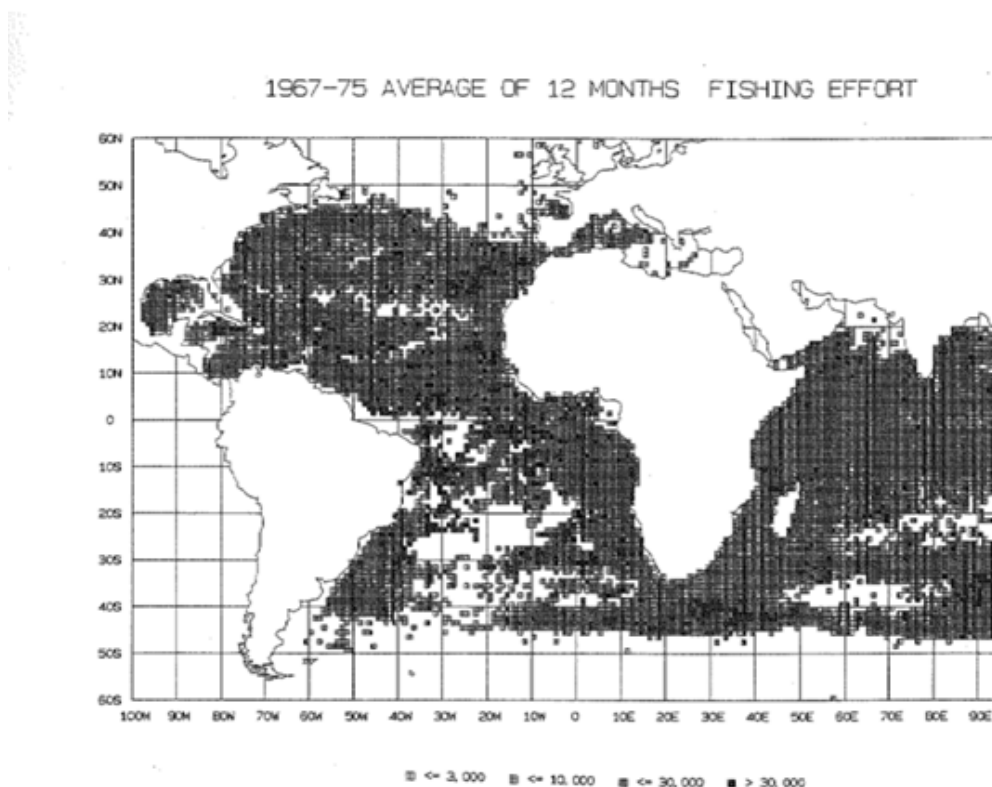


図 1967-1975年（まぐろはえ縄漁業全盛期）における使用針数の分布（大西洋及び西インド洋）
（魚崎他、1997、未発表より引用）

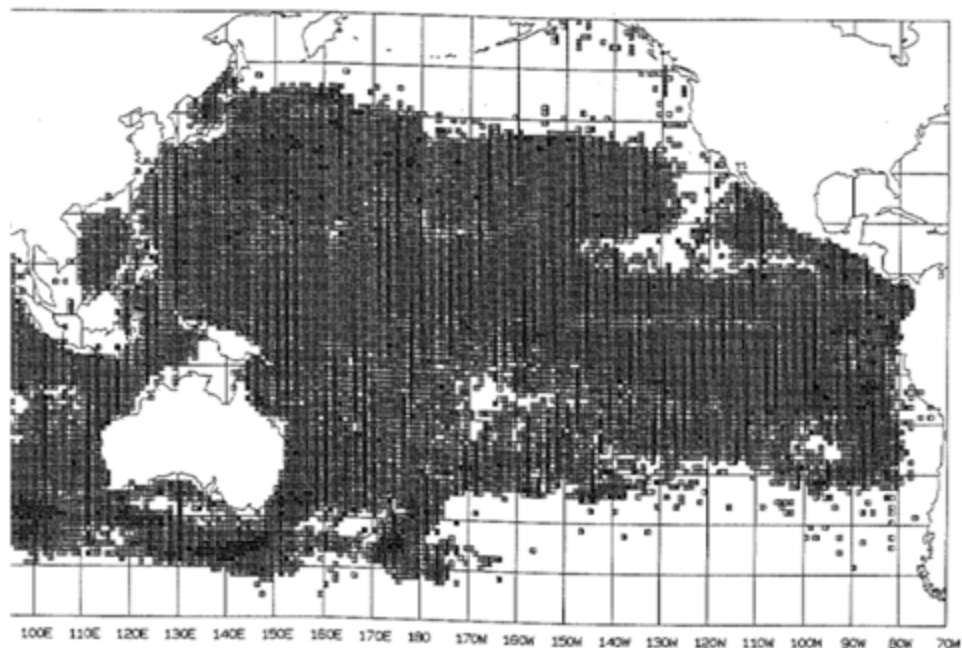


図 1967-1975年(まぐろはえ縄漁業全盛期)における使用針数の分布(太平洋及び東インド洋)
(魚崎他、1997、未発表より引用)

今後の取り組みについて

これまでに、3組の平年漁況図が作成されたが、旧南海区水産研究所版と旧遠洋水産研究所版のあいだの約20年近くの期間と旧遠洋水産研究所版から現在までの約20年の期間については、空白である。まぐろはえ縄漁業の詳しい漁獲成績報告書のファイル化が完了しており、これらの空白を埋める平年漁況図の作成が望まれる。また、このファイルには旧南海区水産研究所版には収録されていない開拓初期の貴重なデータが含まれていることから、再度この期間も含む平年漁況図の作成が望まれる。さらに、未公表となっている旧遠洋水産研究所版は、今日では、日本の詳細なまぐろはえ縄漁業のデータが公開されているので、公開しても問題はないと考えられる。何らかの形で、公開できれば多くの分野で利用価値があると考えられる。手間のかかる作業ではあるが、これらの残された課題がクリアされれば、一連の漁業史が切れ目なく網羅され、後世に残る遺産となり得るのではないだろうか。